

「茶旅」

”こぼればなし“

(36)

中国 庶民がお茶を飲む 場所がなくなっていく

コラムニスト 須賀 努



お茶を飲むのは日常茶飯事、そんな時代が過ぎようとしているのだろうか。日本でそんな話を偶に聞くことがあるが、ことは日本だけで起こっている訳ではない。経済成長に伴い、経営効率が悪先され、人々に時間的なゆとりが無くなり、普通の人が普通にお茶を飲む機会が奪われていくのだろうか。

30年前に初めて行った頃の香港は、その辺で気軽に、極めて安い料金で飲茶を楽しむことができた。因みに飲茶を『ヤムチャ』と読むのは広東語読み。また読んで字のごとく、茶を飲むことを言い、シウマイや餃子を食べることが中心ではなかった。1歳になっただけの息子を連れて行くと『こんな

小さな子にお茶なんか飲ませちゃいけない』と店員のおばさんに怒られたが、息子のことは本当にかわいがってくれて、そんな庶民的な対応が街に溢れていた記憶がある。

広州に初めて行った時、飲茶は昼間ではなく朝行くものだと思い、驚いたこともある。『早茶』と書かれ、朝6時頃、鳥かごを持ったおじいさんたちと一緒に安いプール茶を啜ったことは忘れられない。『毎日飲むんだからそんなに高いお茶は要らないよ』と言いつつ、当時の茶葉は1回分、2-3元だったと思う。点心も2つぐらいをゆつくり食べて帰っていく。その姿が格好良かった。

福建省のアモイでも30年前、いや15

が、運転手は『ここは俺らが行くような店じゃないよ』と吐き捨てるように言った。今や庶民が行ける料金ではなく、ましてや早朝から営業している訳でもなく、単なる高級餐厅になっていた。経営第一となり、茶文化もそれに合わせて高級なものとなっていました。アモイでもここ数年、道端茶文化は完全に影をひそめてしまった。写真を撮ろうと探し回っても、本当に見掛けるとが少なくなりました。以前はじつと見ていると『こっちに来て一緒に飲むか』と声がかかるほどフレンドリーな雰囲気があったが、今やその小さなテーブルを探することも困難になってしまった。

そんな中、先日久しぶりに海南島へ行ってみた。海南島に茶畑があるのかと思う方もいるかもしれないが、古くは少数民族が茶を作り、新中国後は輸出用に紅茶が生産された場所である。省都海口の街を歩いていると、ある一角の建物の下で、大勢の人が集まる



写真:海南島 海口市の老巴茶

場所を発見した。何の飾り気もないところに4人掛け、6人掛けのテーブルがたくさん並んでおり、大人も子供も老人も一緒になってお茶を飲んでた。非常に熱気があり、自由な雰囲気を感じられる。飲んでいるお茶も地元産の紅茶や緑茶粉末を使った飲み物、暑いのでアイスティーなどとバラエティーに富んでいる。服装も暑い地域だけに

年ぐらい前までは、道路のどこを歩いても、小さなテーブルを出し、小さなガスボンベを脇に置き、2-3人でテーブルを囲んで鉄観音茶を飲んでいる姿が見られた。あれはいわゆる工夫茶という、濃い目のお茶だったと思う。お茶の文化とは本来いつでもどこでもお茶を飲んでいて、お茶の香りがするということを学んだのはここだった気がする。

既に1990年代に不動産の高騰が見られた香港では、効率の悪い、客単価の上がらない茶室は次々に姿を消し、高級マンションなどに形を変えて行ったが、この15年、中国の経済成長も物凄い勢いで進んでおり、中国各地でゆつくりお茶を飲む空間が失われていくように見えてちよつと悲しい。

広州でも以前は庭園式の優雅なレストランが、それほど高くない料金で利用できるが、こちらも軒並み閉店、また店の形式が変わってしまった。その昔好んだ北苑へタクシーで行って見た

短パン、Tシャツ、サンダルと言った軽装で、誰でも気軽に出入りできる。軽食は地元製のお菓子など、まさに軽食だった。当然ながら料金は高くない。海南島では『老巴茶』と呼ばれるこの形態に、昔の庶民の茶文化の名残を見る思いだった。何より人々が実に楽しそうだったのが印象に残る。元々は暇な老人たちの集まる場所、パパが茶を淹れるところ、という意味だったが、その後この生活習慣は老海口人全体に広がったらしい。成都の茶館、広州の茶楼、そして海口の老巴茶、今も昔のままの姿を見せているのはここだけかもしれない。

こんな老巴茶も少しずつ減ってきているというから、経済発展というのは、本当に恐ろしい。商業的な茶文化と庶民的、伝統的な茶文化、どちらが好きかは個人の好みもあるが、日本でももつと普通に、気軽に、茶が飲める空間があればよいなと勝手に思ってしまった。(すが つとむ)